

令和 8 年 度

龍 谷 大 学 付 属

平 安 高 等 学 校 入 学 試 験 問 題

B 日 程

国 語

解答上の注意

1. この問題用紙は、「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
2. 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
特に、解答用紙の受験科目欄にマークされていない場合又は複数の科目にマークされている場合は、0 点となります。
3. 「はじめ」の合図のあと、受験番号を書き、マークしてください。
4. 解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。たとえば、**10** と表示のある問いに対して、③を解答する場合は、次の(例)のように解答番号 10 の解答欄の 3 にマークしてください。(例)

解答 番号	解 答 欄									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
11	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0

5. 解答用紙は機械で読み取りますので、折り曲げたり汚したりしないでください。
特に、訂正する場合には、消しゴムで丁寧に消してください。
6. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
7. 問題内容についての質問は受けません。(問題は持ち帰ることができません。)
8. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
9. 「やめ」の合図があったら、解答用紙を表に向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。

(問題は持ち帰ることができません。)

受 験 番 号

[illegible]

国語

(解答番号

1

裏面

101

201

205

301

303

28

第1問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ながらく小説は「母」を取り扱い損ねてきた。

それは虚構が「家族」を取り扱いかねてきた、という意味でもある。なぜなら母こそは家族の象徴であり、A 父は常に家族の外側に存在するからだ。人間にとつての母は、あるいは家族は、今なお自明の前提であり、あたかも自然環境と同じ側に区分される。そのぶん母は謎めいた存在であるとも言い得るだろう。これは、「謎の答えを母自身なら知っている」という意味ではない。「母の謎」は、母自身にとつても謎なのだから。母の謎、それは解釈や解説を免れつつ、母子関係の連鎖の中でただ受け継がれていくほかはない何ものかである。

いっぽう父は、常に「家族の外側」に位置づけられる。これは社会現象としての「父親疎外」といった、※ベタな話ではない。父親とは、根源的な意味において人工的かつ制度的な存在である、ということだ。多くのひとつとして、その父親の言葉はしばしば「家族の言葉」ならぬ「世間の言葉」ないし「社会の言葉」として響くだろう。連続性と持続可能性を担う母親に対して、切断性と統合可能性(「持続」と「統合」はしばしば対立する)という B 父親の機能、という機能分化は比較的にとりやすい。実際にはもう少し事情は逆説的な複雑性をはらむのだが、さしあたりはこの前提で検討を進めることにする。

それでは、「※フィクション」と「家族」はどのような関係にあると言い得るだろうか。

※赤坂真理は、自らの小説もまた、一種の家族小説であると述べていた(※私信)。ただし、それは彼女の小説が直接に家族を描いてきたという意味ではない。いや、むしろ彼女は、ほとんど家族について書いてこなかったのではなかったか。しかし赤坂によれば、C それは彼女が、徹底して家族を描くことを回避し続けてきたためなのだという。この点はきわめて重要だ。単に「家族に関心がない」のではなく、むしろ否認されたものの痕跡として、あるいは一種の黙説法の結果として家族の位置が示される。赤坂のこの※述懐は、本論の一つの起点たり得るだろう。この点から眺めるとき、現代の多くの小説が、ことごとく D 黙説法としての家族を提示しているようにも思われてくるからだ。

それにはやむを得ない事情があったと考えるべきなのかもしれない。おそらく E 「家族」と「物語」は、しばしば対立する概念であるからだ。どういうことか。「家族の機能」が何のために存在するかを考えてみよう。そう、それは何よりも、円滑な日常生活を営むためにある。家族関係は、個人の社会的 ※アイデンティティと心身の安定に寄与しつつ、生殖と養育を通じて、血縁と価値観の持続可能性を高める。日常、安定、血縁、価値観。ここにすでに出された四つの単語をみるだけでも、いかにそれらが「物語」の X となりにくいかは容易にみてとれるだろう。

少年が冒険の旅に出かけるためには、彼に素晴らしい家族がいてはならない。少女が恋に落ちるためには、「安定した心」こそは最大の障害物だ。※貴種流離譚が成立するには、由緒正しい血縁だけでは不足である。※価値素乱者ではない主人公こそが、最もよく「物語」の息の根を止めることだろう。欠如や落差、憎しみや葛藤、懷疑と不安定さを欠いた場所は、物語にとつては不毛の大地だ。最小の物語 ※エレメントとして、これらのすべてを欠くわけにはいかない。そのように考えるなら、私たちは不断に「Y」という問いにさらされていると言っても過言ではあるまい。

しかしだからと言って、家族が物語とは無関係であると言いたいわけではない。ひとたび見方を変えるならば、家族は物語に不可欠な存在であるとすら言い得るだろう。そう、家族にせよ、日常にせよ、価値観にせよ、これらは「物語」に重要な背景をもたらすものだ。いわばそれらは物語の「図」に対して「地」を与えるのであって、「地」は専ら「破壊」と「逸脱」を被ることで、その存在に事後的に気付かれるという位置に置かれる。F 障害態においてしか物語に寄与し得ない概念として、「家族」と「恋愛」は双璧をなす。たとえば※飯田祐子は※田山花袋の『蒲団』を引きつつ、次のように書く。

（中略）

いずれにせよ、ここでも明言されている通り、機能する家族、すなわち「幸福な家族」の物語は、その形成に失敗し続けることでしか、物語の主題たり得ないことは確かだろう。

（斎藤環『文学の断層 セカイ 震災 キャラクター』）

※（文中のことばの意味）

ベタな話…ありきたりな話。

フィクション…作られたもの。作り話。

赤坂真理…小説家。1964年。

私信…個人的な連絡。個人的なやり取り。

述懐…心の中の考えを述べること。

アイデンティティ…自分らしさ。自分とはどのようなものか。

貴種流離譚…高貴な人物が故郷を離れて放浪し、苦難の後に成功するという物語。

価値素乱者…価値観が乱れている人間。

エレメント…要素、成分、原理。

飯田祐子…名古屋大学大学院人文学研究科教授。

田山花袋…明治から昭和にかけての小説家。

問1 ——— 線A「父は常に家族の外側に存在する」とありますが、

その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選

びなさい。

解答番号は

1

① 母親と比べて父親の方が、家族と共に過ごす時間が少ないという

こと。
② 父とは家庭を築くものであり、家族の象徴であるからこそ家

庭内での居場所を失う傾向があるということ。

③ 家族の目線ではなく社会や世間の目線で、父親は発言するこ

とが多いということ。

④ 家族の輪に入ることができない父親の増加が、社会現象として

問題視されているということ。

問2 ——— 線B「父親の機能」とありますが、その「機能」にあ

てはまるものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一

つ選びなさい。

解答番号は

2

① 家族の血縁関係を、連続的に次の世代に継承する。

② 子どもと世間との関わりを切断し、様々な危険から守る。

③ 家族の心身が保たれるよう、安定した価値観を持続する。

④ 子どもが世間に出られるよう、家族と社会を統合する。

問3 — 線C「それ」とありますが、その意味する内容として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。
解答番号は 3

- ① 赤坂真理の小説は、一種の家族小説であること。
- ② 赤坂真理の小説は、完全なフィクションであること。
- ③ 赤坂真理の小説に、家族がほとんど登場しないこと。
- ④ 赤坂真理本人に、家族への関心がないこと。

問4 — 線D「黙説法としての家族を提示している」とありますが、その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 4

- ① 家族同士で用いるような言葉づかいを排除することによって、かえって家族が強調されるということ。
- ② 世間や社会でしか使用されないような言語表現を避けることによって、かえって家族が強調されるということ。
- ③ 家族への関心のなさを全面的に押し出すことによって、かえって家族が強調されるということ。
- ④ 家族を描くことを回避することによって、かえって家族が強調されるということ。

問5 — 線E「『家族』と『物語』は、しばしば対立する概念である」とありますが、「家族」や「物語」の説明として誤っているものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。
解答番号は 5

- ① 家族は、日常的な生活を円滑にさせる。
- ② 家族は、血縁や価値観の持続性を高める。
- ③ 物語は、家族関係を安定させる。
- ④ 物語は、懐疑や憎しみを欠くわけにいかない。

問6 X に入る最も適当な語を、文中から漢字二字で抜き出さなさい。

解答番号は裏面の 101

問7 Y に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 6

- ① 物語か日常か
- ② 冒険か物語か
- ③ 家族か日常か
- ④ 少年か少女か

問8 ———線F「障害態しょうがいたいにおいてしか物語に寄与し得ない概念

として、『家族』と『恋愛』は双壁そうへきをなす」とありますが、その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

7

① 物語において、破壊や逸脱によって物語を阻害することしかできない「家族」は不要な存在であり、それは「恋愛」にも同様のことが言える。

② 物語において、破壊や逸脱によつてのみ物語を支えることができる「家族」は重要な存在であり、それは「恋愛」にも同様のことが言える。

③ 物語において、破壊や逸脱によつて物語を阻害することしかできない「家族」は不要な存在であり、その点で「恋愛」とは根本的に異なっている。

④ 物語において、破壊や逸脱によつてのみ物語を支えることができる「家族」は重要な存在であり、その点で「恋愛」とは根本的に異なっている。

問9 この文章につけられた見出しとして最も適当なものを、次の

①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

8

① 家族⇨母親の疎外

② 「物語への欠如」への苛立いらだち

③ 「母親の呪縛」からの逃走

④ 母性のしくみ

第2問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「松月堂」という本屋を営む「私」（松月平助）は、物事の本質を収めた「物之本」を出版することを夢見ている。本屋といっても店頭での販売だけでなく、主に各地の庄屋などに本を売りに行くことを商売にしている。いわゆる行商人である。

ある日、「私」は町医者、西島晴順からの依頼で、村医者と名匠とされる佐野淇一に、五冊の口訣集（口頭で伝えられた秘伝の医術書）を返却しに行くことになった。この口訣集は、八年前に西島晴順が佐野の家から無断で持ち出した（盗んだ）ものだった。

翌日、未明に店を出て、休みを取らずに早足で歩きつづけ、この前よりも一刻近くも早く※称東堂に着いた。

玄関で案内を頼むと、姿を現わしたのは私と同年輩の、なんともゆつたりした風体の※御仁で、その風体に見合った口調で、「ああ、父に御用ですか」と言った。淇平先生だった。十一月に戻ってくる前の、様子窺いらしい。

「今日は私が代診なので、父はそこらの山際を歩いているはずですよ」近頃、※在野の療法に凝っていて、よく薬草摘みをするのですよ」

※春林軒仕込みと聞いていたので、勝手に近寄りたいたい秀才を想い描いていたら、淇一先生よりもっと親しみやすい感じで、思わずほっとした。挨拶を述べ、礼を言ってから、少しだけ探してみることにした。

駄目で元々で、入れちがいにならぬよう、あくまで「少しだけ」と心して聞いた路を行ったら、もう、町なら角から角まで着かぬうちに、戻ってくる淇一先生の姿を認めた。この前は枯れ芍薬の刈り込みで、今日は薬草摘みだ。どうやら、心の臓はいいらしい。私

は意を強くして「先生！」と声を上げた。

「おや！」

笑顔を返してくれる先生に早足で近づき、余計は入れずに用件を伝えた。

「実は、この前、先生がお話くださった西島晴順のことで、^①折り入ってお伝えしたいことがございまして」

「ほお」

先生は覚えてくれていて、「じゃあ……」と言った。

「その川縁にでも座って話しましょうか」

時候は九月も末だけれど、その日はよく晴れ渡って風もなく、おまけに午が間もなくとあつて、野に咲く花こそ秋の花だったものの、春とまたちがうほどに暖かだった。川は子供の水遊びには^②頃合いの※四間ばかりの幅で、流れも緩く、川縁に腰を着けると快くて眠気を誘われそうだ。

私は柔らかな陽と川の流れと野の匂いに助けられて、西島晴順から聞いた話を語り出した。心がけたのは、話になにも足さず、なんにも引かないことだった。とにかく、^③Aいま、傍らに西島晴順が居て耳を傾けていたとしても、なんら臆することがないように語り通した。そうして最後に、脇に置いた風呂敷包みから五冊の口訣集を取り出した。

私が話しているあいだ、先生は一つとして問いを挟まなかった。ひたすら、耳に気を集めつづけていた。そして、私が語り終えると、「たいへん、ご苦労をおかけしました」と言ってから、言葉を足した。

「さぞ、お疲れになったでしょう。それだけ正しく伝えようとしてづけるには、並大抵ではない根気が要ります。あなたは西島晴順のために、たいへん素晴らしい務めを果たされました」

伝え終えた途端、どっと疲れが押し寄せたのは事実だった。先生の労いで、その甲斐はあつたのかと期待したのだが、しかし、先

生は五冊の口訣集を目にすると言った。

「せっかく遠いところを持ってきていただいたのに申し訳ありませんが、B これは持ち帰ってください」

C 引きかけた疲れが、またじわつと広がった。

「やはり、受け取っていただけませんか」

西島晴順がしきりに気にかけていた「汚点」という言葉が思い出された。

「いや、そういうことではありません」

流れに目を預けたまま、先生は言った。

「それは、西島晴順が持っていたほうが、世の中の役に立つからです」

「世の中の役に立つ……」

「称東堂では、門人たちにいくらでも口訣集を写していいと言っています。ですから、諳んじようとしているのでしよう、写経のように、何回も写す者も少なくありません。ですから、称東堂には口訣集が溢れ返っています。いくらでもあるのです」

そう、なのか。門外不出の、秘伝ではないのか。

「西島晴順には可哀想なことをしました。言って持って帰れば、なんの問題もなかったのに、盗んだと思わせ、返さねばならぬのに返さないと思わせてしまった。その間、己れをずっと傷めつづけたことでしょう。己れで己れを罰しつづけたことでしょう。この口訣集を西島晴順に戻すのは、もう、このことで自分を貶める必要はないという徴です。佐野淇一がそう言っていたと、よくよく伝えてください」

D 私は啞然としていた。世の中に、こんな人物が存在しているのが信じられなくて、穴の開くほど先生の横顔を見つめた。そして、俗人丸出しの、問いを投げかけた。

「しかし、先生」

こういうことは、丸ごとわかるか、まるでわからないか、だ。半端

はいけない。わかったような気でいてはならない。

「口訣というのは秘伝ではないのですか。先生なら、淇平先生にしか伝えないものではないのですか」

「そんなことは、ぜんぜんありませんよ！」

先生には珍しく、E 話にもならないという調子で言った。

「いましがた話したように、称東堂の門人はいくらでも口訣集を写しているのです。修業を終えたら、それを持ち帰って構わないし、持ち帰ったら、仲間の医者に見せて回るのも自由です。縛りはなんにもない。秘伝なんて、とんでもありません」

私はさらに驚く。

「なんで、それほど守らないのでしょうか。苦心を重ねて辿り着いた成果でしょう。真似されないように、盗まれないように、堅固な壁を張り巡らせるのが常道ではないでしょうか」

「＊」

きつぱりと、先生は言った。

「医は一人では前へ進めません。みんなが技を高めて、全体の水準が上がって、初めて、その先へ踏み出す者が出るのです。そのためには、みんなが最新の成果を明きらかにして、みんなで試して、互いに認め合い、互いに叩き合わなければなりません。それを繰り返しているうちに、気がつくと、みんな、遙か彼方に見えた高みに居て、ふと、上を見上げると、もう何人かは、それよりさらに高いところに居ることになるのです。一人で成果を抱え込むのではなく、俺はここまで来た、いや、俺はそこよりもっと先に居ると、みんなで自慢し合わなければ駄目なのです」

◎ 目から鱗、なんてものではない。もの凄。この国のありのままとは、あまりにかけ離れているけれど、そうなるといい。

「残念ながら、この国では、一子相伝とか、なんとか伝授とか、なににの奥義とか、そういう仕組みが根を下ろしています。しかし、それは参加を制限し、競い合いを排除することによって進歩を止め、

限られた者たちで過去の利益を分け合うということなのです。それでも、稽古事くらいならば害は限られるかもしれませんが、医はそうはいかぬのです。生きるか死ぬかであり、生かすか殺すかなのです。進歩しないわけにはいかんです。西島晴順にも言ってくさい。そんなことよりも、医の進歩に力を振り向けろ、と言ってください」

「ならば、先生」

私は先生の話の聴きながら、ずっと胸底で温めていた企てを言うことにした。

「先生のお話からすると、この口訣集を私が本にして、広めてもいいことになりますね」

「Fもちろんです！」

即座に、先生は答えた。

「G願ったりです」

あれから三月ちよつとが経って、もう間もなく年が明ける。

明けたら、刊記に、『書林 松月平助』の店名が印された『佐野淇一口訣集』が出る。

松月堂が、開店十年目にしてようやく※板行する物之本だ。

まさか、なかなか実現できなかった初めての※開板が、医書になるとは想ってもみなかったけれど、私は甚く満足しているし、※矢恵も「伯父さん、凄い」と言ってくれている。

(青山文平 『本を売る日々』)

※(文中の言葉の意味)

称東堂…佐野淇一(先生)が医術を教えている医塾。

御仁…他人を敬って使う古い言い方。おかた。おひと。

在野の療法…主流ではない治療法。

春林軒…紀州の山深くにある医術を教える医塾。

四間…七メートル余り。一間の長さは、約一・八メートル。

板行…書籍や文書を木版で印刷し、発行すること。

開板…書物を新しく出版すること。

矢恵…「私」の弟(佐助)の娘。伯父である「私」を慕い、物

之本を出版することを心待ちにしていた。

問1 線a～cの文中における意味として最も適当なものを、

あとの①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 9 11

a 「折り入って」 9

① 取り急ぎ

② ぜひと

③ じっくりと

④ お許し願えるならば

b 「頃合いの」 10

① 少し手狭の

② 適さないほどの

③ ちょうどよい程度の

④ 最善と言っているほどの

c 「目から鱗」 11

① 自分の思想との食い違いによる戸惑い

② 自分の苦労が無駄になってしまった腹立たしさ

③ 自分の思い込みが誤っていたと気づかされた驚き

④ 自分の信念との相違を指摘されたことによる恥じらい

問2 — 線A「いま、傍らに西島晴順が居て耳を傾けていたと

しても、なんら臆することがないように」とありますが、この表現からうかがえる「私」の心情として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 12

- ① 西島が本を無断で持ち出した事情を、彼から聞いたまま先生に寸分違わず正確に伝えなければならないという気持ち。
- ② 西島が本を勝手に持ち出した事由を告げること、彼が非難されるのではないように事実をひた隠そうとする気持ち。
- ③ 西島の依頼を受けて本を返す窮地に立たされたことを逆手にとって、今後の商売につながるよう計らいを求める気持ち。
- ④ 西島が盗んだ本をはからずも返す羽目になったため、自分も加担したと思われぬよう自己の弁護に躍起になる気持ち。

問3 — 線B「これは持ち帰ってください」とありますが、この言葉に込められた先生の西島に対する心情として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 13

- ① 申し出いかんでは本を持ち帰ることもできたのに、盗み同然の行為で手に入れたことに対して猛省を促そうとしている。
- ② 西島自身が長年罪悪感に苛さいなまれていた状況を知り、もうこれ以上自分を責めず医の進歩に尽力せよと切に願っている。
- ③ 門人でもない西島が無断で本を盗んだにもかかわらず、自身が足を向けたうえで謝罪しないことに対して憤慨している。
- ④ いまや医術における口訣集は、あえて盗みを働かずして容易に入手できるようになったという現実を伝えようとしている。

問4 — 線C「引きかけた疲れが、またじわっと広がった」とありますが、このときの「私」の心情として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 14

- ① 未明から店を出て長い道程を休むことなく歩き続けた疲労感、先生の穏やかな口調によって心身ともに癒やされた。が、本を受け取ることなく持ち帰らせようとする先生の頑固さから、苦勞の甲斐がなかったと先生に対して辟易へきえきとしている。
- ② 西島が本を許可なく持ち出した事情を根気強く説明したことによる虚脱感、先生の称讃する言葉によって解消された。が、本を受け取らずに持ち帰らせようとする先生の強硬な態度から、今までに感じたことのないような威圧感に襲われている。
- ③ 西島の依頼により本を返却しに来た苦勞は、先生の感謝の意を表す言葉によつて一時は慰められた。が、本を受け取らず持つて帰らせる先生の意図がわからないことから、西島からの依頼を受けたことに対する後悔の念を拭い去れないでいる。
- ④ 西島から聞いた話を先生に正確に伝えなければならぬという緊張感、先生の労いの言葉によつて一度は緩和された。が、先生に本を受け取ってもらうことができなかったことから、西島の願いが先生には伝わらなかったと落胆している。

問5 ——— 線D「私は啞然^{あぜん}としていた」とありますが、その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。
解答番号は 15

- ① 口訣集は医術を完全に修得するまでは、他言してはならないという暗黙の了解によって成り立つものであると信じてやまなかった。にもかかわらず、先生は西島が本を持ち出したことを糾弾するどころか、自分の至らなさを打ち明けたから。
- ② 口訣集は医術に関する成果が収められたものとして、嚴重に管理されているものだと思えていた。にもかかわらず、先生は西島が本を持ち出したことを咎^{とが}めることなく、ましてや今日に至るまでの彼の悶々^{もんもん}とした胸中をさえ慮^{おもひ}っているから。
- ③ 口訣集は医術の研究における成果が収められているものであり、今後の医術の進歩に寄与する貴重なものだと認識していた。それがため、門人たちは書写することしか医の知識が得られないことを知り、その修業の過酷さを痛切に感じたから。
- ④ 口訣集は一子相伝とされる秘伝のものであり、門人でもない者には触れられないものだと思えていた。それがため、西島に本を盗まれたことで、長年における先生の研究成果が無駄になってしまうのではないかと一抹の不安を抱いたから。

問6 ——— 線E「話にもならないという調子で」とありますが、この表現からわかる「私」に対する先生の心情として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 16

- ① 行商人として、依頼主との約束を果たそうとする意気込みはわからないでもないが、相手の胸中を知ることなく商いをすめようする「私」に嫌悪感を抱いている。
- ② 西島が犯した行為の善悪をわきまえず、一方的に本を受け取ってもらったことのみ懇願する「私」に対して、医術の本質を知らない素人の礼儀を欠いた横暴さに閉口している。
- ③ 西島から聞いた口訣集に関する誤った情報を何とか修正しようと試みてはいるが、医術の基礎を学んでいない「私」には、到底理解できないことだろうと嘲笑^{ちやうしょう}している。
- ④ 医術に門外漢である「私」にもわかるように、口訣集なるものがどういふものであるかを丁寧に伝えてはいるものの、その真意が伝わらないもどかしさを感じている。

問7 ——— * に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。
解答番号は 17

- ① それをしたら医は進歩しません。患者は救われません
- ② それは傲慢^{ごうまん}というものです。自分の信念とは異なります
- ③ 書を扱う者には到底わからないことです。人間とそれとは違う生きものです
- ④ 書は理想を学ぶことしかできません。医は患者の現実から学ぶべきものなのです

問 8

——線 F 「もちろんです!」、G 「願ったりです」とありますが、先生がこのように応じた理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

18

- ① 医のあり方の現状に疑念を抱きつつも、物之本として口訣集を出版することも手段として認めざるをえなかったから。
- ② 医術を進歩させ、患者の命を救うためには、自身の口訣を物之本として出版し広めることが望ましいと決めたから。
- ③ 患者の生死にかかわる医術の進歩のためには、物之本の出版を企てる「私」の計略に甘んじるほかないと判断したから。
- ④ 門人たちが口訣を写し取り学ぶ姿を目の当たりにすると、自身の口訣を物之本として出版するしかないと節を曲げたから。

第3問 次の各問いについて、それぞれ答えなさい。

問1 次の――線のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

解答番号は裏面の 201 205

1 疲労のせい、体がナマリのように重たい。 201

2 あなたが断言するなら疑うヨチはない。 202

3 メンミツにテスト勉強の計画を立てる。 203

4 来月、美術館でカイが展が開かれるそうだ。 204

5 友人のお誕生日会にショウタイされた。 205

問2 次の――線の語を、それぞれ現代仮名遣いに直しなさい。

ただし、すべてひらがなで書くこと。

解答番号は裏面の 301 303

1 ゆゑもよしもをかし、心やすけれ。 a

2 いにしへの奈良の都の八重桜、けふ九重にほひぬるかな b

3 その山、見るに、さらに登るべきやうなし。 c

a 「ゆゑ」 301
b 「けふ」 302
c 「やう」 303

問3 次の――線の「品詞」として最も適当なものを、あとの

①～⑧のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 19 22

世界でいちばん有名な看護師は、おそらくフローレンス・ナイチンゲールでしょう。彼女は一九世紀のイギリスにおいて、世間の常識を疑い、一人で闘った非常に気高い女性です。

a 「有名な」 19
b 「おそらく」 20
c 「疑い」 21
d 「です」 22

①	動詞
②	形容詞
③	形容動詞
④	名詞
⑤	副詞
⑥	連体詞
⑦	助動詞
⑧	助詞

問4 次のそれぞれの人物を説明した文について、a・bにあてはまる最も適当なものを、あとの①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 23 ～ 28

1 松尾芭蕉

a 時代の俳人で、当時遊戯としての側面が強かった俳諧を芸術の域にまで高めた。旅を愛した芭蕉は、『おくのほそ道』などの紀行文を多く残している。有名な「b」の句は、現在の山形県にある立石寺を訪れた際に詠まれた。

(解答番号は a 23 ・ b 24)

a ① 鎌倉 ② 室町 ③ 江戸 ④ 明治

b ① 菜の花や月は東に日は西に

② 名月を取てくれろと泣く子哉 かな

③ こがらしの地にも落とさぬしぐれかな

④ 閑かさや岩にしみ入る蟬 せみの声

2 夏目漱石

明治から大正時代はじめに活躍した小説家である。英文学者として大学などの講師を務めた後、作家活動に専念した。「a」で始まる、若い数学教師を主人公とした小説「b」は、国民文学として親しまれた。

(解答番号は a 25 ・ b 26)

a ① 石炭をばはや積み果てつ。

② 親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。

③ 八月のある日、男が一人、行方不明になった。

④ 山椒魚 さんしょうおは悲しんだ。

b ① 暗夜行路 ② 鼻

③ 坊っちゃん ④ たけくらべ

3 川端康成

昭和四三年、日本人初の「a」に輝いた人物である。新潟県の湯沢温泉を舞台に、男女のかなわぬ恋を描いた「b」は、日本の叙情文学の最高峰をなす作品として、世界中で翻訳刊行されている。

(解答番号は a 27 ・ b 28)

a ① ノーベル文学賞 ② 芥川賞

③ 国際アンデルセン賞 ④ アカデミー賞

b ① 黒い雨 ② 砂の女 ③ 雪国 ④ 浮雲

これで問題は終わりです。